

## 地域産業プロモーションにおける写真作品制作について

Photography works on the regional industrial revitalization projects in Kyushu

写真映像学科

荒 卷 大 樹

Daiki Aramaki

### 1. はじめに

九州産業大学芸術学部では、2008年度より、芸術学部3学科による合同プロジェクトとして「博多織プロモーション計画」を実施し、2012年度からプロジェクト名を「地域産業プロモーション」に改称し活動を行っている。

地域産業の多くは、ライフスタイルの変化、大量生産方式による安価な生活用品の普及、海外からの輸入品の増加による需要低迷、消費者に対する「本物の良さ」の情報発信不足が言われている。本プロジェクトでは地域産業と連携することで、学生の若いアイデアや感性を有効に活用した製品開発や、展示を実施することで情報発信を行っている（図1）。



図1 イムズでの最終展示（タバストリー作品）

### 2. 写真表現コースの取り組み

写真映像学科 写真表現コースでは、写真作品によって地域産業の魅力をより多くの人々へ情報発信することを目標として活動を行ってきた。2011年度は博多の地域産業である博多織の若手女性織師2人によるユニット「結の音」(ゆいのね)の取材を行った。760年の歴史を持つ博多織の世界の中で、若手女性織師による新しい博多織を目指している2人の作品や作品に対する思いを記録し、博多織の魅力を伝えることを目標として活動を行った。

2012年度は、4月にポスター掲示等で参加学生を募り最終的12名が参加した。それまでの活動に比べ参加人数が増加したことから、取材先対象を4カ所に増やし、テーマを「技～受け継がれるもの～」として、地域産業に携わる職人を取材した。

#### 2-1. 活動時間・活動場所について

写真表現コースの12名の学生は1年次生から3年次生の学生であり、通常の授業時間帯では12名の学生が集まることが出来なかったため、昼休み等の時間を有効に活用し、打ち合わせや会議等を進めた。作品制作や展示準備などの作業は、放課後等の課外時間を利用した。活動場所は主に17号館写真準備室・画像処理室等を利用した。

#### 2-2. 取材先

2012年度の取材では、始めに取材先を学生と共にリストアップする作業から行った。学生の希望を取り入れながら、以下の4件を取材対象とし、同時に取材目標を定めた。

①博多織ユニット「結の音」

博多織デベロップメントカレッジの卒業生2名による博多織織師のユニットである。2011年度に引き続き「結の音」を取材することによって、手織りによる博多織の魅力紹介に加え、前年度では出来なかった、作業内容や制作される作品の違いを取材し、取材内容に厚みを加える。

#### ②博多織ユニット「博多ており◆福福◆」

博多織デベロップメントカレッジの卒業生6名による博多織織師のユニットである。「結の音」と同じく若手女性織師による作品や活動を取材することによって、博多織の良さや魅力を伝える。また、複数名より構成されるユニットによる制作活動を紹介する。

#### ③泥染作家 菊池亮氏

「BOGOLAN」という、天然の植物染料と泥を使用した染めで、衣服や小物などの雑貨を制作している。アフリカの染色手法や染め柄を日本人にも受け入れるように工夫し制作している。独自の手法や表現方法を用いた活動であり、作家として魅力があるため取材対象とした。

#### ④博多包丁鍛冶師 大庭利男氏

手作りで博多包丁を制作し、博多包丁以外にも大相撲の土俵鍬などを手がけている。70歳を超えても制作を続けている姿は職人そのものである。博多包丁の制作の過程や博多包丁に対する思いを取材することによって、職人としての生き様を写真で表現する。

### 2-3. チーム編成

各取材先に対し3人一組のチーム編成を行った。チーム編成はチームリーダーとなる3年次生の学生を軸として、2年次生・1年次生の希望調査を基に振り分けた。一つのチームで1~3年次生を混成することで、撮影や作業を行う際に、3年次生が1・2年次生へスキルや知識等のアドバイスを行いながら進めるという、普段の授業では難しい学年を超えた共同作業を行うことが出来た。これはチーム内に縦の繋がりを持たせ、撮影や作業をスムーズに進めることが出来た。この繋がりや、本活動以外の場面でも見る事が出来た。

### 2-4. 取材

取材に入る前に、取材をスムーズに行えるよう必ず各取材チームで取材内容の確認と役割分担を決めた。事前に打ち合わせを行うことで、質問事項等の欠落や、撮影不足を防ぐことができた。取材先によっては工場や機場のスペースが狭く、複数人での撮影が出来ない場合もあったため、撮影順や日程などで撮影者の調整を行う必要があった。(図2)



図2 博多承天寺での取材風景

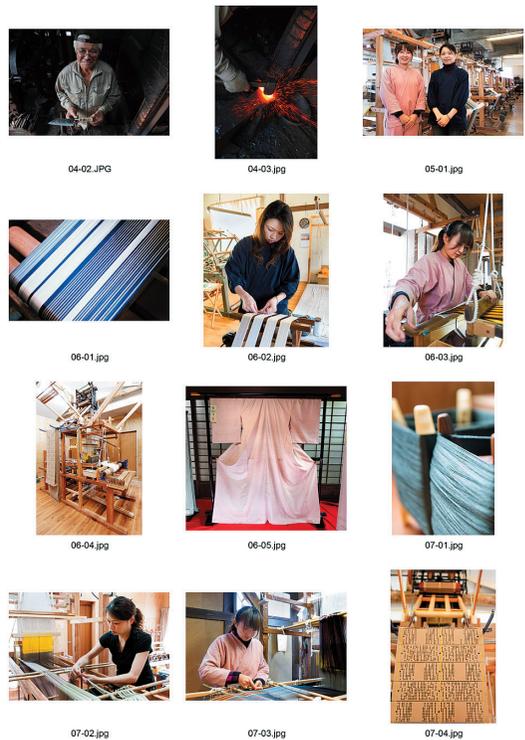


図3 コンタクトシート

### 3. 画像の管理

一度の撮影取材で撮影枚数が数百枚に及ぶこともあり、膨大な画像データを保管する必要がある。撮影データについては基本的に撮影者本人が保存・管理することで画像管理の手間を省いた。撮影した画像を選択する際は、撮影者が候補となる写真を選びコンタクトシートを作成した上で、取材チーム内で画像の選択を行った。選択された画像データについては、共有ハードディスクに保管し管理を行った。(図3)

### 4. 撮影・画像処理

本活動の最終目的である作品展示や、冊子「絹鳴」では写真作品を中心とした構成となるため、撮影した写真画像が重要な要素となる。これらの成果物は複数の画像を使用するため、画像毎の色合いやトーンを統一することが重要なポイントとなる。また、最終展示では長さ約1×8mの大型のタペストリー（画像サイズ900×600mm）とパネル制作が計画されていたため、色合いを含め画質などに注意を払いながら制作を進める必要があった。

#### 4-1. 撮影

撮影に使用するカメラは学生が所有するカメラを使用した。撮影後の画像処理においてスムーズに作業が進められるよう、撮影時のルールを決め学生に周知した。

##### ①適正露光での撮影

取材・撮影場所は工場や機場などの室内の撮影が中心となる。窓からの外光によっては被写体が逆光になる場合も多く、露出不足になる可能性が高い。画像処理による明るさの調整は可能であるが、ノイズの増加や色合いの悪化が発生するため、撮影時は適正露光になるよう適切な露出補正を行った。

##### ②ストロボの使用

前述のように室内での撮影では光量不足になる場合が多く、ストロボを使用することで光量を補うことが可能になる。しかし、撮影の状況に

よっては被写体の前景にある物体の影の映り込みや、被写体の背後に影が発生するなど、後処理では修正不能な結果を招く場合があるので、今回はできる限りストロボの使用を控えた。

##### ③RAWデータでの画像記録<sup>(※1)</sup>

通常デジタルカメラでは記録された画像データはJpegデータとなる。デジタルカメラで記録されるJpegデータは撮影時のカメラの設定によってホワイトバランス<sup>(※2)</sup>・明るさ・コントラスト・色味等が調整された状態で保存される。また、この調整についてはカメラメーカー・機種毎に異なっているため、画像処理における調整が非常に難しい作業になる。これを防ぐため、今回の撮影では全てRAWデータで記録し、編集を行った。

#### 4-2. 画像処理

最終展示の大型タペストリーとパネル制作や冊子作成を念頭に置き、画像処理を行った。画像処理においても以下の様にルールを決め作業を進めた。画像処理の作業は全てAdobe Photoshopで行った。

##### ①画像の色空間はAdobeRGBで処理を行う。

本活動で撮影を行う被写体には、鮮やかな色彩を持つ織物や鋳造中の鉄など彩度が高い物が多い。一般的に利用されているsRGBのカラースペースと比べ、画像が保持できる色空間が広く、高彩度の被写体でも色再現できることからRAWデータを処理する際、画像はAdobeRGBカラースペースで処理した。(図4・5)

##### ②画像の色深度は16bitで取り扱う。

RAW現像後に明るさ・色合い等の微調整を行う。編集作業時の画像劣化を最小限に抑えるため、画像は16bitデータとして書き出しを行い、編集作業も16bitのまま作業を行った。

##### ③調整レイヤーを使用して画像の調整を行う。

トーンカーブや色相彩度等の調整は調整レイヤーを使用して行う事によって、編集作業での画像劣化を防ぐと共に、編集作業の効率を上げる。



図4 基画像

図5 左 AdobeRGB 右 sRGB  
炎の鮮やかさで差異がある。

複数画像間のトーン・色味の調整については、チーム毎に画像調整を行うことで、統一化を図った。また、最終的な色判断はキャリブレーションを実施したディスプレイを使用し、微調整を行うことで印刷時の色ずれを最小限に抑えることが出来た。ディスプレイのキャリブレーションについては、展示物の観察環境光に合わせて調整を行うことが理想であるが、今回は印刷原稿を制作する際に利用する、調整値 (D50 ガンマ1.8 80カンテラ) を使用した。(図6)



図6 RAW現像によりシャドウ部からハイライトまでディテールを残した再現が出来ている。

## 5. 印刷

本活動の最終目標である、最終展示では、各学科グループの統一感を図るために展示パネルのフォーマットが作成・配布された。配布されるフォーマットはIllustratorファイルになっているため、AdobeIllustrator上で画像・文字・ロゴなどを配置し印刷を行う。

印刷時は使用する大判プリンタと用紙に合わせ、適切なプリントプロファイルを使用し印刷することによって、パソコンディスプレイ上で確認を行ってきた明るさ・色合いを再現することが出来た。(図7)

博多織の帯作品を写した画像ではディスプレイ上では確認することが出来なかったモアレが発生した。(図8) モアレが発生した画像についてはPhotoshop上でカラーモードをRGBからLabモードに変換し、輝度情報を持つLチャンネルに対してぼかしフィルターを適用し、再度RGBモードに変換することで、画像のシャープ感を失わずに、モアレを解消した。

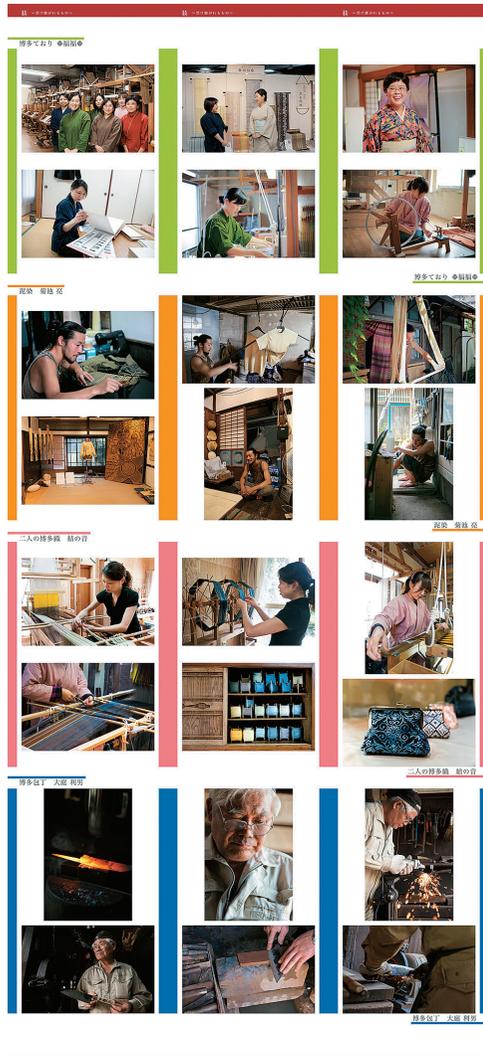


図7 最終展示での大型タペストリー作品



図8 モアレが発生した画像（拡大）

6. まとめ

現在、九州産業大学ではKSUプロジェクト型教育を推進している。本活動でも、学生主体で活動を行うことで、参加学生それぞれが役割を見つけ、行動し、より良い作品を制作する姿を垣間見ることが出来た。

取材では、仕事として作品の制作を行っている職人と直に話すことで、仕事に対する意識や取り



図9 最終展示 A2作品

組みの考え方を学生に伝えることが出来た。就職を意識した学生もおり活動を通して学生に対して良い影響を与えることが出来たと考えている。

また、撮影取材・編集・制作を行う過程で、普段の授業では気づく事の出来ない課題や問題が発生した。それらの問題に対して学生同士や教員を含め、解決に向けて考え、工夫することで問題を解決した。問題解決のプロセスを始め、実践的な撮影技術や知識・処理技術を習得することが出来ていると考えられる。今後も学生の主体性を重視し、普段の授業では得ることが出来ない実践的な活動を行っていきたいと考える。

(※1) RAWデータ=デジタルカメラの撮像素子で得られた情報をそのままデータとして記録する形式。画像処理を行う際には“現像”と呼ぶ処理を行う。この作業の際にホワイトバランスや明るさ色味等を調整することが可能である。また、RGB各チャンネルが保持できる輝度情報もJpegデータが8bit(256階調)に比べ12bit(4096階調)以上の情報を記録することが出来るため、画像処理での調整の自由度が増える。

(※2) ホワイトバランス=撮影時の照明光の色温度に合わせて撮影画像の色温度の調整を行う設定。